

独立行政法人自動車事故対策機構就業規則

平成15年10月1日
機構規程第4号

改正 平成17年 3月15日 平成17年機構規程第 5号
改正 平成21年 3月27日 平成21年機構規程（総務）第 3号
改正 平成22年 3月31日 平成22年機構規程（総務）第 4号
改正 平成22年 6月30日 平成22年機構規程（総務）第 6号
改正 平成25年 3月26日 平成25年機構規程（総務）第 1号
改正 平成28年12月26日 平成28年機構規程（総務）第19号

第1章 総則

（目的）

第1条 この規則は、労働基準法（昭和22年法律第49号）第89条第1項の規定に基づき、独立行政法人自動車事故対策機構（以下「機構」という。）の職員の就業に関する事項を定めることを目的とする。

2 この規程の定める事項のほか、職員の就業に関する事項については、労働基準法その他の法令の定めるところによる。

（適用範囲）

第2条 この規則は、理事長が機構の職員として採用した者（以下「職員」という。）に適用する。

第2章 勤務

第1節 勤務心得

（職務の遂行）

第3条 職員は、機構の規則を遵守し、上司の指示に従って、誠実にその職務を遂行しなければならない。

（禁止行為）

第4条 職員は、次の各号に掲げる行為をしてはならない。

- (1) 機構の名誉をき損し、又は機構の利益を害すること。
- (2) 職務上知ることができた秘密を漏らすこと。
- (3) 理事長の許可を得ないで他の業務につくこと。
- (4) 職務上必要がある場合のほか、みだりに機構の名称又は自己の職名を使用すること。
- (5) 機構の秩序又は職場規律をみだすこと。

（届出事項）

第5条 職員は、次の各号に掲げる事項について変更を生じた場合は、すみやかに当該職

員を指揮監督する権限を有する部長、室長、主管支所長又は支所長（以下「所属長」という。）を經由して理事長に届け出なければならない。

- (1) 現住所
- (2) 戸籍記載事項（本人の分に限る。）
- (3) 学歴及び資格
- (4) 身元保証人に関する事項
- (5) 扶養親族に関する事項
- (6) その他人事管理上必要として指示された事項

第2節 勤務時間、休憩時間及び休日

（勤務時間）

第6条 職員の勤務時間は、1週間につき39時間10分、1日につき7時間50分とし、始業時刻及び終業時刻は、次表のとおりとする。

組 織	午 前		午 後	
	時刻	時間	時刻	時間
本 部	9:00～12:10	3時間10分	13:00～17:40	4時間40分
地方機関	8:30～12:10	3時間40分	13:00～17:10	4時間10分

2 所属長は、業務上必要がある場合は、理事長の許可を得て、前項の始業又は終業の時刻を変更することができる。

3 第1項に定める1週間の勤務時間の起算日は土曜日とする。

（休憩時間）

第7条 休憩時間は、12時10分から50分間とする。

2 所属長は、業務上必要がある場合は、理事長の許可を得て、前項の休憩時間又はその開始時刻を変更することができる。

（休日）

第8条 休日は、次の各号に掲げる日とする。

- (1) 日曜日及び土曜日
- (2) 国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日
- (3) 1月2日、1月3日及び12月29日から12月31日までの日
- (4) その他理事長が特に指定する日

2 所属長は、業務上必要がある場合は、前項の休日を他の日と振り替えることができる。振り替えられた休日の勤務は、当該他の日の勤務のとおりとする。

3 第1項で定める休日のうち日曜日を労働基準法第35条に定める休日（法定休日）とする。

第3節 時間外勤務及び当直

(時間外勤務)

第9条 職員は、業務上必要がある場合は、第6条に規定する勤務時間以外の時間又は前条に規定する休日に勤務を命ぜられることがある。

第4節 出勤及び欠勤

(出勤)

第10条 職員は、出勤した場合は、自ら出勤簿に押印しなければならない。

2 職員は、機構の業務のため、出勤できない場合又は始業時刻までに出勤できない場合は、事前にその事由を付して所属長に届け出なければならない。ただし、やむを得ない事情がある場合は、事後すみやかに届け出るものとする。

(遅刻等)

第11条 職員は、遅刻、早退、欠勤又は勤務時間中に一時職務を離れる場合は、事前にその事由を付して所属長に届け出なければならない。ただし、病気その他の事故により事前に届け出ることができなかつた場合は、事後すみやかに届け出るものとする。

2 職員は、傷病のため1週間以上にわたって欠勤する場合は、前項の届出に症状及び療養必要日数を記載した医師の診断書を付さなければならない。

(欠勤日の年次休暇への振替)

第12条 職員は、前条第1項の届出をした場合は、その時間又は日数を第14条に規定する年次休暇の日数の範囲内で当該休暇に振り替えることを請求することができる。

第5節 有給休暇、育児休業及び介護休業等

(有給休暇)

第13条 有給休暇は、年次休暇及び特別休暇とする。

(年次休暇)

第14条 職員は、毎年1月1日から12月31日までの間において20日の年次休暇を受けることができる。

2 年の途中で採用された職員の受けることのできる年次休暇の日数は、その職員の採用された日の属する月に応じて、それぞれ次表に定めるとおりの日数(以下「基本日数」という。)とする。ただし、国家公務員等から引き続き機構の職員となった者の年次休暇の日数は、20日に当該年の前年の年次休暇の残日数(当該日数が20日を超える場合にあっては、20日)を加えて得た日数から、職員となった日の前日までの間に使用した年次休暇の日数を減じて得た日数(当該日数が基本日数に満たない場合にあっては、基本日数)とする。

採用月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
休暇日数	20日	18日	17日	15日	13日	12日	10日	8日	7日	5日	3日	2日

3 前2項の年次休暇の未使用分が生じた場合は、当該未使用分（20日を超える場合は、20日）を翌年に限り繰り越すことができる。

4 年次休暇は1日又は半日を単位として受けることができる。ただし、労働基準法第39条第1項及び第2項に定める年次休暇の日数以外の年次休暇については、1時間を単位として受けることができる。

（特別休暇）

第15条 職員は、次表の区分に掲げる場合には、同表に定める日数又は時間の範囲内で特別休暇を受けることができる。

区分		日数又は時間
結婚の場合	(1) 本人が結婚する場合	5 日
	(2) 子が結婚する場合	2 日
	(3) 兄弟姉妹が結婚する場合	1 日
出産の場合	(4) 本人が出産する場合	出産予定日前6週間（多胎妊娠の場合にあっては、14週間）及び出産後8週間
	(5) 配偶者（届出をしないが事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む。以下同じ。）が出産する場合	2日（休暇の単位は、1日又は1時間）
	(6) 配偶者が出産する場合であって、出産予定日前6週間（多胎妊娠の場合にあっては、14週間）及び出産後8週間の期間において、当該出産に係る子又は小学校就学の始期に達するまでの子（配偶者の子を含む。以下同じ。）を養育する職員が、これらの子を養育する場合	当該期間内における5日の範囲内の期間（休暇の単位は、1日又は1時間）
死亡の場合	(7) 配偶者が死亡した場合	10 日
	(8) 父母又は子が死亡した場合	葬祭を主宰する者にあつては7日、その他の者にあつては4日

	(9) 祖父母又は兄弟姉妹が死亡した場合	葬祭を主宰する者にあつては4日、その他の者にあつては3日
	(10) 3親等以内の親族（配偶者、父母、子、祖父母及び兄弟姉妹を除く。）が死亡した場合	葬祭を主宰する者にあつては3日、その他の者にあつては1日
その他の場合	(11) 妊産婦である女性職員が母子保健法（昭和40年法律第141号）第10条に規定する保健指導又は同法第13条に規定する健康診査を受ける場合	以下回数（1回につき1日） 妊娠満23週まで 4週間に1回 妊娠満24週から満35週まで 2週間に1回 妊娠満36週から出産まで 1週間に1回 出産後1年まで その間に1回 ただし医師等の特別の指示があつた場合には、その指示された回数
	(12) 妊娠中である女性職員が通勤に利用する交通機関の混雑の程度が母体又は胎児の健康保持に影響があると認められる場合	勤務時間の始め又は終わりにつき1日を通じて1時間
	(13) 妊娠中の女性職員の業務が母体又は胎児の健康保持に影響があり、適宜の休息又は捕食が必要であると認められる場合	必要時間
	(14) 生後満1年に達しない子を育てる職員が、その子の保育のために必要と認められる授乳等を行う場合	1日2回、1回30分 （男子職員にあつては、その子の当該職員以外の親がこの休暇又は労働基準法第67条の規定による育児時間を請求した場合は、当該請求に係る期間を差し引いた期間を超えない期間）

<p>(15) 小学校就学の始期に達するまでの子（配偶者の子を含む。以下この区分において同じ。）を養育する職員が、その子の看護（負傷し、若しくは疾病にかかったその子の世話をを行うこと又は予防接種若しくは健康診断を受けさせることをいう。）のため勤務しないことが相当と認められる場合</p>	<p>一暦年において5日（小学校就学の始期に達するまでの子が二人以上の場合にあっては、10日）（休暇の単位は、1日、半日又は1時間）</p>
<p>(16) 職員が配偶者、父母、子、配偶者の父母、その他理事長が認めた者で、負傷、疾病又は老齢により2週間以上の期間にわたり日常生活を営むのに支障がある者（以下のこの号において「要介護者」という。）の介護又は要介護者の通院等の付添い若しくは要介護者が介護サービスの提供を受けるために必要な手続きの代行その他の要介護者の必要な世話をを行うため勤務しないことが相当と認められる場合</p>	<p>一暦年において5日（要介護者が二人以上の場合にあっては、10日）（休暇の単位は、1日、半日又は1時間）</p>
<p>(17) 生理日の勤務が著しく困難な場合</p>	<p>2 日</p>
<p>(18) 天災、不可抗力の発生、公民権の行使その他特別の事由がある場合</p>	<p>必要日数又は必要時間</p>
<p>(19) 骨髄移植のための骨髄液の提供希望者としてその登録を実施する者に対して登録の申出を行い、又は骨髄移植のため配偶者、父母、子及び兄弟姉妹以外の者に骨髄液を提供する場合で、当該申出又は提供に伴い必要な検査、入院等のため勤務しないことがやむを得ないと認められる場合</p>	<p>必要日数又は必要時間</p>
<p>(20) 職員が第32条第1項に規定する健康診断を受診した場合</p>	<p>1日又は必要時間</p>
<p>(21) 職員の勤務能率の発揮及び増進のため機構が計画したレクリエーション等の行事に参加した場合</p>	<p>必要日数又は必要時間</p>
<p>(22) 父母の祭日の場合</p>	<p>1 日</p>
<p>(23) 夏季における盆等の諸行事、心身の健康の維持及び増進又は家庭生活の充実のため勤務しないことが相当であると認められる場合</p>	<p>一の年の7月から9月の期間における、休日を除いて原則として連</p>

		続する 3 日
(24)職員が自発的に、かつ、報酬を得ないで次に掲げる社会に貢献する活動（専ら親族に対する支援となる活動を除く。）を行う場合で、その勤務しないことが相当であると認められる場合 イ 地震、暴風雨、噴火等により相当規模の災害が発生した被災地又はその周辺の地域における生活関連物資の配布その他の被災者を支援する活動 ロ 身体障害者療護施設、特別養護老人ホームその他の主として身体上若しくは精神上の障害がある者又は負傷し、若しくは疾病にかかった者に対して必要な措置を講ずることを目的とする施設であって別に定めるものにおける活動 ハ イ及びロに掲げる活動のほか、身体上若しくは精神上の障害、負傷又は疾病により常態として日常生活を営むのに支障がある者の介護その他の日常生活を支援する活動	一暦年において 5 日	
(25)職員が、裁判員の参加する刑事裁判に関する法律（平成 16 年法律第 63 号）に規定する裁判員として裁判所へ出頭する場合		必要日数又は必要時間

2 職員は、前項の場合において、片道 5 時間以上の旅行を必要とする場合は、同項に規定する日数に往復に必要な日数を加算した日数の特別休暇を受けることができる。

3 特別休暇が休日の前後にわたるときは、当該休日を特別休暇の日数に算入するものとする。

（休暇の届出）

第 16 条 職員は、有給休暇を受けようとする場合は、事前にその事由を付して届け出て、所属長の承認を受けなければならない。ただし、災害等によりあらかじめ届け出ることができなかった場合は、事後すみやかに届け出るものとする。

2 所属長は、前項の届け出があった場合には、原則、年次休暇の承認を行わなければならない。ただし、当該届け出られた年次休暇を承認することが業務の正常な運営に支障がある場合においては、他の時期にこれを変更することができる。

（育児休業及び介護休業等）

第 17 条 職員は育児休業、介護休業及び早出遅出勤務等を受けようとする場合は、事前に申し出て理事長の承認を受けなければならない。

2 前項の育児休業、介護休業及び早出遅出勤務等に関する事項については、別に定めるところによる。

（妊産婦の業務軽減等）

第18条 理事長は、妊娠中である女性職員から申し出があった場合には、その者の業務を軽減し、又は他の軽易な業務に就かせなければならない。

2 理事長は、妊産婦である女性職員から申し出があった場合には、その者に時間外勤務、休日勤務又は深夜勤務をさせてはならない。

第6節 出張、研修及び転勤

(出張、研修及び転勤の命令)

第19条 職員は、業務上必要がある場合は、出張、研修又は転勤を命ぜられることがある。

2 出張、研修又は転勤を命ぜられた職員には、別に定めるところにより旅費を支給する。
(赴任)

第20条 職員は、転勤を命ぜられた場合は、転勤の命令を受けた日から起算して7日以内に旧任地を出発しなければならない。ただし、やむを得ない事由により出発を延期することについて、事前に新任地における所属長の承認を得た場合は、この限りでない。

第3章 給与

(給与)

第21条 職員の給与は、別に定めるところにより支給する。

第4章 任免

第1節 採用

(試用期間)

第22条 職員に採用された者については、採用の日から6月を試用期間とする。ただし、国家公務員等から引続き機構の職員となった者については、この限りでない。

2 職員は、前項の試用期間中において職員としてふさわしくないと認められた場合は、第28条の規定にかかわらず解雇されることがある。

(書類の提出)

第23条 職員に採用された者は、次の各号に掲げる書類を理事長に提出しなければならない。

- (1) 履歴書
- (2) 戸籍の謄本又は抄本
- (3) 誓約書及び身元保証書
- (4) その他人事管理上必要として指示された事項に関する書類

第2節 休職及び復職

(休職)

第24条 職員が次の各号の一に該当する場合は、当該職員に休職を命ずることができる。

- (1) 結核性疾患による欠勤の期間が引き続き1年を超えるとき。
- (2) 前号に該当する場合を除き、傷病による欠勤の期間が引き続き6月を超えるとき。
- (3) 刑事事件に関して起訴されたとき。
- (4) その他特別の事由があるとき。

2 前項第1号又は第2号に規定する欠勤が引き続き1月を超えた後出勤した職員が、出勤日数10日に満たない間に同一事由により再び欠勤をはじめた場合は、その出勤した日の前後の欠勤期間を通算するものとする。

(休職の期間)

第25条 前条第1項第1号又は第2号の規定による休職の期間は、療養を要する程度に応じ、2年以内の期間とする。ただし、前条第1項第1号の規定によるとき、又は特別の事由があるときは、1年以内に於いてこれを延長することがある。

2 前条第1項第3号に該当することによる休職の期間は、その事件が裁判所に係属する間とする。

3 前条第1項第4号に該当することによる休職の期間は、そのつど定める。

(復職)

第26条 前条第1項に規定する休職の期間が満了する前又は満了した場合において休職事由が消滅したときは、すみやかに復職を命ずるものとする。

2 前条第2項又は第3項に規定する休職期間が満了した場合は、第28条の規定により解雇する場合及び第38条の規定により免職の懲戒を行う場合を除き、すみやかに復職を命ずるものとする。

第3節 退職及び解雇

(退職)

第27条 職員は、次の各号の一に該当する場合は、退職するものとする。

- (1) 退職を願い出て理事長の承認を得た場合
- (2) 第25条に規定する休職の期間が満了した場合において、なお、休職の事由が消滅しない場合
- (3) 年齢満60歳に達した日以後における最初の3月31日

(解雇)

第28条 職員が次の各号の一に該当する場合は、当該職員を解雇することができる。

- (1) 職員としての能力を著しく欠く場合
- (2) 心身の故障のため職務の遂行に支障があり又はこれに堪えられない場合
- (3) 定員の減少又は組織の改廃により過員又は廃職を生じた場合
- (4) 第38条に規定する免職の懲戒を受ける事由がある場合
- (5) 禁錮以上の刑に処せられた場合

(退職手当)

第29条 職員が退職し、解雇され又は死亡した場合における退職手当の支給については、別に定めるところによる。

第5章 保健衛生

(協力義務)

第30条 職員は、衛生管理者の指示に従い、保健衛生上必要と認める措置について、協力しなければならない。

(結核性疾患及び伝染病の届出等)

第31条 職員は、本人が結核性疾患にかかった場合又は、本人、本人の同居者若しくは近隣の者が感染症（感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（平成10年法律第114号）に規定する感染症をいう。以下同じ。）にかかり若しくはその疑いがある場合は、ただちにその旨を所属長に届け出て、その指示を受けなければならない。

2 前項の場合には、その職員に、一定期間を限り療養又は出勤停止を命ずることができる。

3 同居者又は近隣の者が感染症にかかり若しくはその疑いがある場合で、前項の出勤停止の命令を受けて欠勤したときは、その欠勤は出勤とみなす。

(健康診断)

第32条 職員は、機構が毎年定期又は随時に行う健康診断を受けなければならない。

2 前項の健康診断の結果必要があると認められる場合その他保健衛生上必要があると認められる場合には、その職員に療養を命じ又は必要な措置をとらなければならない。

第6章 災害補償

(療養費の負担等)

第33条 職員が職務上負傷し又は疾病にかかった場合は、労働基準法の定めるところに従い、その職員について必要な療養を行い、又は必要な療養費を負担する。

2 前項の負傷又は疾病による欠勤は出勤とみなす。

(障害補償)

第34条 職員が職務上負傷し、又は疾病にかかり、治癒した場合において、なお身体に障害を存するときは、労働基準法の定めるところに従い、その職員に障害補償を行う。

(遺族補償及び葬祭料)

第35条 職員が職務上死亡した場合は、労働基準法の定めるところにより、その遺族又は当該職員の死亡当時その収入によって生計を維持していた者に対して遺族補償を行い葬祭を行う者に対して葬祭料を支払う。

(保険給付との関係)

第36条 この章の規定により補償を受けるべき職員が、同一事由について労働者災害補償保険法（昭和22年法律第50号）の定めるところにより、この章の災害補償に相当する保険給付を受ける場合には、その給付の限度において、この章の規定による補償は

行わない。

第7章 表彰及び懲戒

(表彰)

第37条 職員が、機構の業務に関し特に功労があった場合又は勤務成績優秀で、他の模範とするに足ると認められた場合は、別に定めるところにより、これを表彰する。

(懲戒)

第38条 職員がこの規則に違反した場合は、別に定めるところにより、次の区分による懲戒を行う。

懲戒の種類	懲戒の内容
戒告	将来を戒める
減給	労働基準法に定める範囲内で、情状により適宜給与を減額する。
停職	3月以内の期間を定めて出勤を停止する。この場合には、当該期間中の給与は支給しない。
免職	予告しないで解雇する。

(損害賠償)

第39条 職員が、故意又は重大な過失により、機構に損害を及ぼした場合は、前条の規定により懲戒を行うほか、情状により、損害の全部又は一部を賠償させることがある。

第8章 補則

(読み替え)

第40条 部長、主管支所長又は支所長の職にある職員について、第5条、第6条の2第1項、第8条第2項、第11条第1項（同条第2項の場合に限る。）、第20条又は第31条第1項の規定を適用する場合には、これらの規定中「当該職員を指揮監督する権限を有する部長、主管支所長又は支所長（以下「所属長」という。）」又は「所属長」とあるのは、それぞれ「総務担当理事」と読み替えるものとする。

2 審議役の職にある職員について、第5条、第6条の2第1項、第8条第2項、第11条第1項（同条第2項の場合に限る。）又は第31条第1項の規定を適用する場合には、これらの規定中「当該職員を指揮監督する権限を有する部長、主管支所長又は支所長（以下「所属長」という。）」又は「所属長」とあるのは、それぞれ「総務担当理事」と、第6条第2項、第7条第2項、第10条第2項、第11条第1項（同条第2項の場合

を除く。)又は第17条第1項の規定を適用する場合には、これらの規定中「所属長」とあるのは、「審議役」と読み替える。

附 則

- 1 この規則は、平成15年10月1日から施行する。
- 2 第27条第3号の規定により退職となる職員で、退職後再任用又は嘱託として引き続き雇用されることを希望する職員については、年齢が65歳に達する日以後における最初の3月31日まで継続雇用する。ただし、以下の事由に該当する者についてはこの限りではない。
 - (1) 心身の故障等により職務遂行に重大な支障のある者
 - (2) 職員としての能力を著しく欠く者
 - (3) その他勤務状況が著しく不良であるなど職員としての職責を果たすことができないと認められる者
- 3 前項の場合における再任用及び嘱託としての継続雇用については、別に定めるところによるものとする。

附 則 (平成17年3月15日 機構規程第5号)

この規則は、平成17年4月1日から施行する。

附 則 (平成21年3月27日 機構規程(総務)第3号)

この規則は、平成21年4月1日から施行する。

附 則 (平成22年3月31日 機構規程(総務)第4号)

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

附 則 (平成22年6月30日 機構規程(総務)第6号)

この規則は、平成22年6月30日から施行する。

附 則 (平成25年3月26日 機構規程(総務)第1号)

この規則は、平成25年4月1日から施行する。

附 則 (平成28年12月26日 機構規程(総務)第19号)

この規則は、平成29年1月1日から施行する。